

第7回高等学校改革プラン推進委員会（第三推進委員会）議事録

1 日時 平成17年9月9日（金）午前9時00分～午後0時00分

2 場所 伊那市生涯学習センター〔いなっせ〕 研修室 501,502

3 出席委員

池上 昭雄委員長	熊谷 秀男委員
笠原 伸二副委員長	丸茂 貴子委員
小坂 樫男委員	小池 博委員
岡庭 一雄委員	関 哲夫委員
小林 辰興委員	北原 秀樹委員
小口 武男委員	藤本 功委員
北原 曜委員	

4 開会

（野村主幹教育支援主事）

皆さん、おはようございます。

少しお時間が早いようですが、皆さんがおそろいですので、時間を有効にということで始めさせていただきたいと思います。本当に、本日はお忙しい中、時間を割いてお集まりいただきましてありがとうございました。

それでは、委員長さん、よろしくお願いいたします。

（池上委員長）

はい。おはようございます。

それでは、今お話がございましたように第7回の会議を開催いたしたいと思います。よろしくお願いいたします。では、座って進めさせていただきます。

それでは、資料説明を事務局でお願いいたします。

5 資料説明

高校教育課野村主幹教育支援主事より、資料・他地区推進委員会審議状況について説明
【説明内容省略】

（池上委員長）

ありがとうございました。

それでは、内容についてご質問がございましたら、お受けをいたしたいと思いますが、いかがでございましょうか。

資料をいただいた中で、資料1につきましては、私のほうで今日議論を予定しております区割りの調整数についてのご参考にしていただきたいという意味でございます。それから資料2でございますが、できますればおおむね10月の会議以前に、例えば私とすれば各学校を1回は訪問しておきたいなというふうな認識を持っておりまして、そういう資料がございませんかと申し上げましたらこれをご提示いただきましたので。また、その他の学

校につきましても、後ほど最後くらいで、今後の予定のところでまた申し上げていきたいと思しますので、よろしくお願いいたしますと思います。

私のほうはそういう付け加えをさせていただきます。

(小口委員)

ここに学校自己評価表というものがありますが、これがどういうものなのかちょっとよく分かりませんが、説明をお願いします。

(野村主幹教育支援主事)

2年ぐらい前からでしょうか、この学校自己評価というものをやっております、年のはじめのところに今年の学校目標といいますが、「こういう活動をして、自校のことをこのように評価していきたい」と。他にも評価していただけるような場面もございますが、その自己評価だけに関して、平成17年ですので、今年はこういう目標でという形で各校が掲げております。学校によってちょっと様式は違う部分もありますが、おおむね同じような形で掲げてあるものでございます。実際には、皆さんのところからは、それぞれの高校のホームページにアクセスしていただきますと、今年のものが掲げてございます。昨年のもについては、やはり自己評価した結果というものまでは、同じようにそれぞれの高校のホームページに載ってございますので、またご覧いただければと思います。

よろしいでしょうか。

(小口委員)

そうしますと、これは学校の目標ということで考えていいわけですね。

(野村主幹教育支援主事)

はい。学校の目標、あるいは、もちろん今まで抱えている課題を意識しておりますので、課題に対してどのように対処していくかということまで含めての時に考えていただければと思います。

(小口委員)

ありがとうございました。

(小林委員)

今の学校自己評価の件であります。これは今後、大変参考にしなければいけない資料なのですが、先ほど私のこの前のレポートとの絡みでという話でしたのですが、私があのに求めたのは、このような資料ということではなくて、例えば、少人数学習、それから補習、習熟度別と、この前私が出したものが行われているわけですが、現在の状況の中で、今の体制の中で今後ともできるのかどうか。今の体制をさらに維持していった場合に、これでは先生の数が足りない、または現状で何とかできるのかというところを聞いたかったところです。

それがないと、ちょっと再編の話も、先生たちの単なる犠牲で成り立っていったいいの

かどうかということがありますので、そのへんの資料が欲しかったということです。それを全部ということは無理かと思いますので、抽出でも結構かなと思います。特に学校名を出さなくてもよろしいかなということで、そういうものを欲しかったということです。

以上です。

（池上委員長）

分かりました。それについて、確かにこれからの議論の中では大変に必要な資料だと思いますが、その点で、事務局でご発言がございましたらお願いしたいと思いますが。

（柳澤教育主幹）

それぞれの学校が、いわゆる学級集団としては1クラス40人定員ということで行っているわけですが、学習集団としては、習熟度別学習、あるいは少人数講座というようなことで、ほとんどの学校がそういう展開をしております。例えば、英語では、3クラスを4講座展開というようなことで、学習集団を小さめにして運用するとか、あるいは選択科目もたくさん増えてきておりますが、選択科目は、学習集団としては20人とか30人とかいった少ない中で展開をしているという努力をほとんどの学校でしながら、そういうことを実施しているということでございます。恐らく学校規模としては、やはりある程度の規模になっておりますと、選択講座もたくさん選べるものがつくれるという違いはあろうかと思いますが、それぞれの学校規模に応じて工夫をしているということでございます。

具体的な資料をとということでもありますので、そのへんは検討させていただいて、幾つか抽出でというようにも今考えているところであります。

（池上委員長）

よろしゅうございますか。

（小林委員）

はい。

6 議事

（池上委員長）

ほかにございますか。それでは、質疑はここで止めていきたいと思います。

それでは、今日はいよいよ地区割りの議論に入りたいと思いますが、実は、前回3人の方に資料をご提出いただきました。また関連して、今日も藤本委員からも資料2をいただいておりますが、藤本委員の今日いただいたものにつきましては、大変重要な資料だと思いますので、また後刻議論をさせていただくということにさせていただいて、前回、小林委員のほうから、学力向上、意欲向上というところで、今のお話に関連してご意見がございました。

それから、藤本委員から、総合学科の評価についての意見がございましたので、先般の状況ですが、ちょっと私のほうの時間配分が悪くてご説明が足りないかもしれないというように思っていますので、もし補追がございましたらお願いしたいと思います。

小林委員、いかがでございますか。

(小林委員)

補足ということよろしいですか。

私がこの前発表したことの中で、「魅力ある学校づくり」はいろいろな視点があるということを描いたわけですが、その中で、今回は多部制・単位制高校設立にかかわって、これをどう考えていくかということについて、ちょっと付け加えさせていただきたいと思います。

私が調べた視点から言いますと、やはり履修科目の選択幅が拡大されていくことが1つ大事だということと、体験学習や実地的な学習を広げていくこともありました。それから、これは少人数学級の良しあしはさておいて、少人数学習というものは、どうしても高校でも必要なんだなということがあるわけです。

その前に前提として、私がいろいろ調べてみますと、やはり多部制・単位制の学校の成立条件は幾つかあると思うのですが、それをまず考えたいわけです。まず一つに、県教委高校教育課でもこれは第1番にしていることですが、地域の理解と連携がどうしても必要だということです。この前、藤本委員さんが話した、志学館の学校がどうしてうまくいっているかということの一つは、地域がぜひこの学校をつくって欲しいということがありましたよね。だから、それがないとちょっと難しいのではないかと。だから、最低限地域が、他の学校も納得しなければいけないのですが、対象となる学校こそは納得しない限りは実現不可能かなということが第1の条件だと思います。

それから第2の条件は、今回のように全日制学科を全部なくして単独配置するには、生徒数が、長野県でいうと第3通学区、第4通学区を全部合わせたところから通学できる範囲。例えば、この前の県教委で出た富山の高岡の例。それから私が調べた広島福山の例。それから大阪の例。みんなそういう生徒数が非常に大勢存在するところでも可能だけでも、今回のような、通学範囲も極めて限られた上に、定時制がそのまま残されるというような現状の中で配置するなら、どうしても既設の学科を併設して設立しなければ不可能ではないかと思います。これが第2の条件になります。

それからもう1つ私がさっき言った、この多部制・単位制を本当に魅力あるものにしていくには、やはり2本立てが必要かなと。1つとしては、やはり不登校の生徒の受け皿が、どうしても現在の状況では必要かなと。従って、この余地は、この中のどこかで位置付けてやらなければいけない。ただし、さっき言ったかもしれないのですが、従来から見るそういう生徒のほとんどが、不登校ないしは怠学です。今、怠学が、不登校の中でとても多いのです。従って、こういう子たちが最終的に意欲的になっていくには、少人数学習が絶対の前提だと思います。

しかし、これだけでは多部制・単位制の「魅力ある学校づくり」にはならないなということで、もう1本は、さっき言った体験的、実地的学習、それから選択科目の思い切った拡大ができるような学校を、この多部制・単位制の中で目指さないと、「魅力ある学校」ということで生徒は集まって来ないだろうと思います。

例えば、「僕は、学校で勉強もしたいが、実地でもっと学びたい」と。例えば、「農業の勉強を学校でもしたいが、実際に農家へ行って、ある時だけではなくてかなりの時間をそ

ういう実地的な学習をしたい。または、工業においてもそんな形をとる等して、そういう本当に目的をしっかり持った形の教育課程を組まなければなりません。単に好きな時に好きな時間帯を選んで、それから好きな科目だけというようなことは、あとで藤本先生から発表があるかと思いますが、非常に弊害になっていってしまうということです。私が言った3つの視点を生かしていくような形で多部制・単位制をつくらないと、失敗するのではないかということを思います。

いったんつくったが、子どもが集まらなかったというようなことは、これは、もう絶対失敗はしてはならない設立ですから、そういう状況もよくよく考えてやって欲しいなと思います。「魅力ある学校」の教訓からそういうことを感じたので、ちょっと付け足させていただきました。

以上です。

(池上委員長)

ありがとうございました。

貴重なご意見だと思います。また後ほど、いわゆる科目というところの議論が出てまいりますので、そこでもまた議論をお願いしたいと思います。

藤本委員、前回の総合学科についての補追意見がございましたらお願いしたいと思っています。

(藤本委員)

資料のとおりですので、特に補追はありませんが、私は、やはり総合学科はそれなりに認めるよい点があるのだなと。これは全然否定はしません。ただ、地域に期待されている職業高校をつぶすということに対しては、慎重にいかなくてははいけない。やはり地域の皆さんの意見、やはりそれを必要としている生徒もいるし、それから期待している生徒も、保護者の地域もあるわけで、どちらかと言えば、私は困難なことを抱えている、北原曜委員さんおっしゃる習熟途上校というのは現にあるわけで、学校現場でも、若干はそういう点は期待するということが教職員の中であるわけです。

ただ、県教委さんの頭の中には財政問題が重くのし掛かっていて、私は教育の部分からいったら、本来的にはそういう学校は必要ではないかなという気がしております。

塩尻志学館高校については、あのとおりで非常にうまくいっているということです。ただ、1点だけプリントで落としましたが、やはり進学に軸足を置いているということは事実だと思います。

(池上委員長)

ありがとうございました。また、後ほど議論をお願いしたいと思います。

それでは、前回、北原曜委員からもご提案がございましたし、今日はその点のについての議論を深めていきたいと考えておりますし、できれば結論を得たいというふうに考えておりますが、よろしくをお願いしたいと思います。

その前に、今ちょうど藤本委員からもありました財政認識の件は、ある意味では冒頭に認識をいただいた。それから、前々回で、諏訪が治外ではないというような認識もいただ

いたと考えております。

今日は、北原委員から具体的な資料のご提示をいただきましたので、その点についてはご意見をご提示いただきたいと思いますので、よろしく願いしたいと思います。

(北原曜委員)

1枚紙です。ご覧になってください。「第7区の高校統合について」というものです。

これは、7月12日の委員会におきまして、「第3通学区の高校改革の議論の一助とするために」というところで、県教委案に対する問題点を列挙しましたが、その中で、特に募集定員等についてまとめたものです。

7月12日付の県教委案に対する問題点には、中学卒業者の減少率に関する問題、県立高校が89校と膨らんできたピークの平成2年を100パーセントにするのか、平成17年を100パーセントにするかで全然数字が違ってきますので、その点の問題点を指摘しました。

それから、第7区、第8区、第9区のそれぞれの高校の数に関する問題です。現状では、9校、8校、8校ですけれども、9校、6校、7校となってしまう。

それから、工業高校、職業科の問題です。狙い打ちという感があるということの指摘をしましたが、今日提出したのは、一部重複はしていますけれども、第7通学区全体の問題点について並べてみました。まず、(1)普通科、これは理数科と英語科も含んだものですけれども、これの募集定員がほかの区と比べてちょっと多いので、その分が募集定員の増となっていると。約300名近くが増えているということです。県全体から見ても、第7通学区の普通科の比率は70パーセントを超えているということで、ちょっと多くなっています。

2番目として、第8通学区からの流入数が119名、これは3クラス分に当たりますけれども、これがあるにもかかわらず空きがある。それから、松本・塩尻のほうから来る数も合わせて、流入数マイナス流出数が215名ということになっていますので、第7通学区はほかの通学区からかなりの数、200名以上が入ってきていることになります。

それから3番目として、普通科の習熟途上校。先ほど藤本委員のほうからちょっとありましたが、8月18日付の提出資料で、難しいところもあるのですけれども分類させていただきました中で、その習熟途上校についてまとめたものです。これについても、第7通学区は、茅野、向陽、岡谷東と非常に多くなっています。なお、これには地域高校は入っていません。

それから今度は大きい2番目ですけれども、今までが第7通学区の全体の問題点で、2番目は個別高校の問題点です。第7通学区の中で、第8通学区からの流入数、あるいはほかからの流入数が非常に多くて、それでもなおかつ定員に満たないで空きがある高校というのが、ほかにも若干はあるのですけれども、目立つものが茅野、向陽、岡谷東です。流入数が、例えば向陽ですと19名とあるのは、第8通学区からの流入数、プラス4人とあるのはほかの通学区からの流入数です。岡谷東では18名、プラス45名となって、これは塩尻・松本地区からの流入数が45名あるということになります。それからその横に空き数があります。定員に満たなかった数ですね。これは、各高校の要覧から抜粋した数字です。

こういうものを見てみますと、向陽と岡谷東が、それぞれ1クラス分以上が第7通学区の受け皿となっていないということになっています。それから2番目として、空き数だけ

見ても、向陽と岡谷東が、1クラス分は余剰となっているということになります。

そういうことを考えてみますと、現行で5クラス分が向陽と岡谷東にそれぞれあり、募集定員になっていますけれども、実質は9クラスであると。それで、流入数も考慮すれば、実際は7、8クラス分が第7通学区の中学卒業生の受け皿になっているということになります。

地域高校に当たるかどうかはちょっと微妙なのですけれども、茅野高校は現在160名で4クラスですけれども、空きがやはり19名あると。4クラスが維持できていないということになります。

基本は4クラスが維持されるということが県の高校の位置付けですので、そういう点から考えてみますと、茅野、向陽、岡谷東というのが現行ではちょっと問題があるのではないかという指摘でございます。

以上です。

(池上委員長)

ありがとうございました。

これは大変議論が多いかと思いますが、まずご自由にご発言をいただきたいと思いますが、いかがでございますか。

(野村主幹教育支援主事)

すみません。事務局からでございますが、最初のところにだいたいの間のデータを使っていたいてありがたいと思うのですが、学科ごとの数字で、「普通科の募集定員が他通学区と比べて異様に多く」というように書かれているわけですが、県全体の比率というのは、『最終報告書』の19ページのところに円グラフになって出ておりますので、これをご覧いただきたいと思います。

確かに、第7区のところの1,360名は、第7区の全体の募集人員からみると73.9パーセントぐらいになって、県全体のものは68.3パーセントというように19ページのほうに出てございますので、普通科については5.6パーセント高いというように言えるわけであります。

ただ、ほかの学科も見ていきますと、第7区の中では、工業科は13パーセントになっておりまして、全県と比べてもやはり2.9パーセント高いとか、あるいはほかの通学区の話になりますけれども、例えば、同様に計算しますと、第9区の工業科は全県と比べても高いとかいうことは確かにございます。簡単に言うことでこぼこがあるということになります。トータルで言えば、普通科、工業科とも全県の傾向と比べて、第3通学区の募集定員の比率は高いかもしれませんが、それぞれ地域の特性を考慮いたしますと、ある程度の違いはあっても当然かなというように思われます。この高いというのは「異様に」ととらえるかどうかは別としてですが。

以上であります。

(北原曜委員)

例えば、工業の盛んな地域では工業科が多いとか、農業の盛んなところでは農業科が多いという地域の特色が出てしかるべきですし、そうであらねばならないと思いますが、ではなぜ職業科ではない普通科が、第7区だけ突出して多いのか。これが、やはりちょっとキーになります。

(池上委員長)

もしご意見がございましたら、そうでなければそういうとらえ方をやりますという範囲にとどめたいと思いますけれども、いかがでございますか。よろしゅうございますか。

そのほかにご意見をどうぞ。

(小口委員)

先日、諏訪である学校の先生とちょっと話をしてみましたら、このごろ小学生が増えているという話がありました。それで、今、確かに私どもの周りの小学校も中学校も大変クラス数が減っているということなのですけれども、どうもだんだん増える傾向になって、いいなというふうに思ったわけですが。

先日の第1回の資料で見ますと、確かに第7区、私どもは諏訪ですが、平成17年と比べるとやはり徐々に人員が増えているという感じはいたします。先ほど北原先生も、平成2年を100とするか、平成17年を100とするかという問題がありますが、周りの高校を見ますと、結構新しい校舎の学校が多ございまして、清陵も、二葉も新しくしたばかりでありますし、そういう意味では、私は学校統合をして学校を大きくするというのは大いに賛成なのですけれども、現状増えている段階の中で学校を統合したときに、学校をまた新たにつくらなければいけないという現実が、またすぐ目の前に出てくるのかどうか。そのへんを、ちょっとお教え願いたいのですが。

(柳澤教育主幹)

この『最終報告書』で出ております中学校の卒業者、それから推定の募集学級数の推移という資料編の12ページの表がございますが、もしありましたらご覧いただければと思います。

平成31年までのデータで出ておりまして、これは平成16年5月1日現在の資料でございますが、その時生まれている子どもたちの数が入っております。公式に発表されている数字を使ってそこに入れ込んでございます。グラフにも出ていますとおり、ずっと減少傾向が続いてきております。そして、平成17年に入りますと、平成32年という数字がここに今年はお出してくるわけでございますが、その数字はまだ確定した数字になっておりませんので何とも言えませんが、本県情報政策課から出ております資料を見ましても、全県的に見ると、平成31年よりも同じような比率で減少傾向にあるということで、やはり少子化の傾向が逆の方向に上向いていくというような傾向は見られないというように理解をしているところでございます。

従いまして、この先、平成32年よりももっと先にどうなのかというのは、なかなか難しいところもあるわけでございますが、『最終報告書』の資料の人口問題研究所のほうから出

ております「日本の人口推計」の、資料編で言いますと P 19 と P 20 のところに出ているわけですが、こういった今後の日本の人口の推計値を見ましても、やはり減少傾向にあるということは分かるのではないかと理解しているところでございます。

(池上委員長)

ありがとうございました。

これは重要な視点だと思いますが、今の資料を折れ線グラフで示した表も実はございまして、確かに諏訪は減少率が比較的なだからで、その中位にくらいするのが上伊那で、やや急なのが下伊那というふうなトレンドです。特に諏訪は、平成 25、26 年から平成 30 年くらいが、ちょっと子どもたちが増えているととれるのがありますが、また今話がございましたように平成 31 年あたりから急激に下がっておりまして、上伊那とかなり接近しているというふうな状況もございまして、諏訪の今日現在の状況が、諏訪の今後を語っているかどうかということはちょっとそう言えないのではないかとように、個人的に思っているのですが、ここのところは重要なところです。

(小池委員)

お願いします。

幾つか感じるがありますが、諏訪の普通科の進学が高いという指摘について、やはり歴史的に工業地域としてのこだわり、専門教育を是とする風土、風潮があるということであると思います。それから第 8 区から入って来ている子どもは、各校の普通科に入ってきているわけで、それが諏訪の特徴として普通科進学者希望の高さという結果として出ているのだらうと思います。

それから、4 学級規模を対象に考えた場合、はっきり 19 とか 20 とかあるわけですが、基本的にこれが高校統合の理由にはならないのではないかと思います。はっきり言えば、学級減でいくらかでも対応できるわけです。そのへんのところの論が少し無理があるかなと思います。

それと、向陽高校が減ったのは去年だけのことで、その前まではずっとオーバーしていたわけで、これは単年度の減少だということです。それから、向陽高校も、習熟途上校と言っていいのかなということも、ちょっと私は疑問に感じます。

ひとつの案としてこれはいいわけで、数字の対比でありますけれども、諏訪の場合は、H32 年までの推移の人口数もありますし、やはり統廃合というよりも学級減でいくらかでも対応してきているという部分があります。その辺のところもお考えいただけたらなというように思っています。

(関 委員)

中学の卒業生の減のことなのですが、平成 2 年を基準に置くか、平成 17 年を基準に置くかということですが、平成 2 年から平成 17 年までは学級減で対応してきているわけです。さらに生徒数が減っていきますので、学校規模が小さくなって学校の活性化が保たれなくなるということから、今度は学校減で対応せざるを得ないというのが今回の流れだというように私は理解しております。

『最終報告』の12ページをご覧くださいますと、学級数のところですが、第7区は43学級から、平成31年も43学級で変わっていないわけです。この学級数は、流出や流入、あるいは普通科志向が高い地域とか、いろんな要素を勘案して考えておられるもので、これを見ますと、第8区は39学級が34学級になっているし、それから第9区は37学級が31学級に減っているわけで、単に生徒数だけでなく学級数を基準に考えるべきだと私は思います。

それから、北原委員さんのこの案はひとつの案だとは思いますが、特に過去には第8区からの流入数があるにもかかわらず空きがあるというのは、諏訪地区特有の県外への流出が、前の資料では75名というように出ていたと思いますが、これは他地区に比べて非常に多い数字だと思います。地理的な原因もあると思うのですが、下伊那から愛知や静岡へ行くのはかなり地理的に無理がありますし、あるいは木曽から岐阜への流れでもかなり無理があると思うのですが、諏訪は、そういう意味で比較的地理的に出やすいという理由があると思います。その流出をやはり考慮していかなければならないというふうに思います。

それから(3)の習熟途上校という言い方がいいかどうかはちょっと疑問に思いますが、これは3校あるから、従って減らすんだという理由にはならないのではないかと思います。こういう言い方をもしするのだとすれば、先ほどもご指摘のとおりこれ以外にもあるはずです。

諏訪地区から空きがあるということは確かなのですけれども、しかしここを1校統廃合というようなことにすれば、今以上に流出に拍車がかかるということになって、基本的な解決にはなっていないのではないかと思います。

以上です。

(小口委員)

先ほどちょっと質問をしたのですが、期待していた答えが返ってきていないように感じております。

実は、今、第7区は46クラスあるんですね。それが平成29年あたりを見ますと48クラスとなっていますから、先ほど小学生が増えていると、このへんの状況なのかなということなのですから、できれば学校数はある程度減らして、子どもが多いという状況をどうしても望んでいるわけです。

その時に、例えば1校減らすと5クラス減るわけでしょう。5クラスが減って、これが2クラス増えるわけですから、その7クラスなり、そういう部分を吸収する余地が現在の高校にあるかと。こういうことをお伺いしたいのです。

(池上委員長)

これは、事務局へお願いしたいと思いますが、どうでしょうか。

(柳澤教育主幹)

どこをどうするかというようなことで、もう少し具体的になりませんと、またどの年度でということになりませんと、正確なシミュレーションはできませんが、ほかの学校の学級数を増やしていくということは可能だろうというふうに思います。それをどこの学校に

どうするかという細かいシミュレーションまでは、もう少し具体的になりませんと言えませんが、可能ではあるというように思います。

（池上委員長）

というようなところですね。よろしゅうございますか。

関委員のお話のところなのですが、北原曜委員、そのところはいかがですかね。

（北原曜委員）

学級減の対応ができなくなって、学校減の対応ということなのですが、確かにそうなのですけども、では、2の(1)の茅野高校はすでに定員割れしているわけです。これは4クラスですけども。そういう形になっていますし、向陽、岡谷東も、それぞれ空きもありますし、流入数も非常に大きいということになって、実質各校4クラスを維持できない形になりつつあると考えてもいいのではないかと思います。

さっき諏訪は流出数が多いというお話がありましたが、県外流出ですね。流出数が多いということは、その通学区の中の高校に魅力がないと。やはり進学したいならば、より高いところの高校に行きたいとかいうことだと思うのです。これはとても大きな問題だと思うのです。進学校のところで、前々回8月18日付の検討資料のところで分類をしていたわけですが、県内の進学校の成果というのはあまり芳しくないですね。そういうこともあって、流出せざるを得ないということではないかと思っています。

基本的には、自分の区のところに行きたいのです。それはどうしてかといったら、これだけ生活も厳しくなって、お金も厳しくなっている時代ですから、通学にかかるお金はなるべく減らしたいわけです。それはどこの家庭もそうだと思うのです。ですから、なるべくなら自分の通学区のところで流出や流入を少なくしてやるというのが、「魅力ある高校」のあるべき姿ではないのでしょうか。

（小林委員）

私は前から言っているように、やはり諏訪も1校は検討すべきだなということは今も変わりませんし、基本的には北原先生の考え方には賛成であります。

正直に言って、今まで旧第7通学区、旧第8通学区、旧第9通学区が、2校、1校と削減の対象という、たたき台なんていうことは言っていますけれども、どうしてもこれが絶対的な必然性があるわけではない。そういう中で減らさなければいけないということで検討しなければいけないと思うのです。だから、学級減はもう当然のことで、旧第7通学区も学級減をした上で考えていくべきだということが1つであります。

それから2つ目ですが、これも私は前から言っているように、確かに過去には非常に第7区へ上伊那からの流出が多かったし、今もあるわけですが、それがとても変わってきている、流出が減ってきている。その一番の原因は、第7区の普通科が多過ぎるということがひとつあると思います。ということは、私が前回レポートで示したように、普通科はコース制などでいろいろと工夫していますが、どうしても「魅力ある学校」というのがいまま一つできていないという中で、上伊那も流出が止まるというか、むしろ逆に諏訪からも来ている生徒が辰高などは増えてきております。

ということで、やはり普通科が近くに幾つもあるということはやはり諏訪の特長かなということで、そういう意味で、減らすかどうかは別として、ジョイントとかという工夫は検討する必要はあるかなということです。

もう1つ、県外流出のこともあるわけですが、私はやはり、第7通学区は私立高校の存在がとても大きいと思うのですよね。東海三高、それから松本へも容易に私立高校も選択できる。私立は今、本当に県立とは比べものにならないほど、命をかけていろいろやっています。ですから、どうしても第7通学区の場合は通学的に行きやすいし、しかし、第8通学区は女子校がありますけれども極めて限られているという条件も考えても、第7通学区は統合ということも検討する必要があるのかなと思います。

以上です。

(関 委員)

先ほどの流出の件ですが、流出の理由というのいろいろな要素があると思いますけれども、そのひとつに魅力がないから流出するのだということもあるかもしれません。それは、私どもの努力しなければならないところでありまして、今、各校で努力しているところでもあります。

ただ一方で、諏訪地区では流入もかなりあるわけで、ちょっと今、私は数字が出てこないのですけども、第11区からの流入、あるいは第10区からの流入ということもありまして、もし「魅力」ということだけで言うのなら、魅力があるから流入してくるんだという部分もあるのだというように思っております。

それから、ジョイント校というのは、私はあまりメリットがないと考えています。物理的に、本当に接近している学校でないと行き来もできませんし、それから、いわゆる統合のメリットというのはないというように思っております。

以上です。

(小林委員)

関先生にお聞きしたいのですが。

そうしますと、先生のお考えでいうと、駒ヶ根工業高校と赤穂高校が結局統合ということですが、これが3.何キロメートルもありますよね。そのところは、先生はどうお考えですか。

(関 委員)

それは、ジョイント校とは違うのではないですか。

(小林委員)

でも現状は、今のところそういう傾向が非常に強いのですよね。すぐに、完全に駒ヶ根工業をなくしてしまうということではないと思いますが。県では、全く最初からなくすという考えというようには私は思っていないが。

(関 委員)

段階的にはそうかもしれませんが、私が理解しているのは、ジョイント校というのは違うと思いますが。

(池上委員長)

今のところで、すみません、ちょっと待ってください。事務局でご発言がございますか。今のジョイント校論議のところですね。

(柳澤教育主幹)

ジョイント校のことは、今回の候補案の中には、ここがジョイント校であるというようなことでは出ていないわけですが、『最終報告書』をまたご覧をいただきたいと思います。本文の11ページにジョイント高校の説明がございます。「近接する複数の学校が校地(キャンパス)を維持したまま統合し、生徒・教員が各キャンパスを移動することが可能な学校である」という表現がしてありますが、両方の校地をそのまま維持をし、そして統合するというイメージがジョイント校ということでございます。

今お話がありましたように、候補案の中ではそういうスタイルをとっているところはないわけで、「ジョイント校」という表現がないわけでござりますが、今の、例えば駒ヶ根工業の場合のことで言いますと、当面両方の校地、校舎の有効活用をはかりながら、将来的には統合していくというような表記だったかと思いますが、そういう点で、若干このジョイント校とは異なるということで表記していないということでございます。

(池上委員長)

小林委員、よろしゅうございますか。

(小林委員)

でも、どっちみちジョイント校というのも、いずれそういうことを含むものではないかなと、私はとらえていました。

(小池委員)

余計なことかもしれませんが、「魅力ある高校」との関係で、やはりこれだけご理解をお願いしたいと思います。

確かに諏訪の場合、流入・流出の関係が非常に多いわけですが、まず1点は、第8区から来ている子どもというのは、割に学力的に高いんですね。はっきり言いますと、北原先生の習熟途上校云々は別問題として置いても、そこへさえも入れない子どもがあるわけで、それがお隣の県へ流出する部分となるわけです。

それから、近年、特に進学志向がありまして、大進コースとか、それから松本あたりのところへ移動するという部分も多少出てきております。それと、郡外の特徴ある高校といいますか、例えば、山梨の航空高校であるとか、甲府湯田であるとか、小諸の音楽科であるとかいうところへ選んでいくという流出も始まっています。

それから、3つ目は、諏訪にはエプソンをはじめ全国的な企業がありますので、そこへ

異動し子どもが諏訪の公立中学校へ入って来ます。そしていよいよ高等学校進学です。高校教育は東京で、又は、私立へという形でそちらへ行ってしまう。先ほど小林先生の言われた東海大三高をはじめとした私立への動きも増加しています。こういう多様なひとつの動きがあることをご理解いただきたい。

私は、例示された、向陽、東、茅野の各校の学級数と充足生徒数の関係で、4 学級で 160 人いるべき所 - 19 人しかならず、従って、学校減という論のどうもその辺が引っかかってしょうがないのですけれども、だからどこかひとつにまとめてしまえという論は、私にはどうしても乱暴だという感じがして仕方がないのですが。

以上です。

（北原曜委員）

乱暴というお言葉だったのですけれども、実際に 4 クラスを維持できないならば、もう統合の対象として検討していくというお話だったので、これを提出したわけで、乱暴ではないと私は思いますが。

（小林委員）

小池先生がおっしゃった、上伊那から流出していくのは学力が高い子が多いということですが、そういう要素もないわけではないと思いますが、もうひとつ上伊那の今までの進路指導の特徴としましては、他郡へ行く場合には、安全と、いわゆる確実に入れる子はいくが、ボーダーラインのような子はできるだけ避けているという、これは先生が指導はしているという面もあるけれども、子どもたち自身がそういう安全、確実に入れるという子が行くものですから、結果的にそういうことはあり得るかなということでもあります。上伊那の高校がややみな学力が低い子で、向こうへ学力が高い子が行くということでは全くありません。

以上です。

（池上委員長）

今の小池委員のほうから、客観的な表現を幾つかいただきましたので、議論の参考にはなったのですけれども。それが、どういう程度だとかいう議論になると、そこのところは難しいかなと思うのですが。

（熊谷委員）

すみません、第 7 区の議論があるわけですがこの北原曜先生につくっていただいたペーパーが、先ほどどなたからも出ていましたけれども、歴史とか地区事情というものは相当考慮する必要があるのではないかという話がありました。例えば私も第 9 区の立場でいいますと、このペーパーを見て、例えば単純に、工業科を 240 名で諏訪と一緒にするというように比べてありますが、第 9 区の工業科の 240 名には、実はほかの通学区にはない建築・土木というものが 80 名入っているわけです。これは、ほかの第 7 区にも第 8 区にもございません。そういった学科を、長姫に設置してきたという歴史もあるわけです。そういったやはり違いもあります。

例えば、習熟途上校うんぬんで、第9通学区は松川しかありませんよと記載されているわけですが、では本当に第9区としてはそういうくくりでいいのかというと、若干違うのではないかなと、これは地域校との絡みもあるわけですが、そういう観点もあるのかというように思いますので、単純に第7区、第8区、第9区をここへ並べて、では第7区をどうするんだという議論はなかなかしづらいというのは、私どもの目から見ると少なくとも思うわけであります。

従いまして、今いろいろ聞いていますと、正直言って私からみれば、諏訪の高校が、茅野なり、向陽なり、岡谷東なり、富士見なりという高校がどういった背景を持っているのか、またどういった状況を持っているのかというのはほとんど分からないわけですし、これはもう、私が前から言うように、この第3通学区が非常に広範囲であったり、また情報も交流されていないという状況もあると思いますので、そういう部分でいいますと、やはり第7区をどうするのだという議論をするのであれば、もう少し第7区の中で、十分分かった皆さんがきちんとした議論をしてもらうことのほうが必要なのかなと、その上に立って、じゃあどうなんだという議論がここにあるといいのだと思いますが、正直、私は今ずっと議論にはほとんど参加できない状況であります。逆に、このペーパーだけで議論が進むのは非常に怖いという気がしましたので、申し添えておきます。

特に私が言いたいのは、この間の県教委のペーパーもそうだったのですが、長姫高校の土木・建築を、工業科だから飯田工業高校へ持っていけばいいのではないかなというように書いてございましたけれど、私はこれがこの間から気になっています。長姫高校にあるのは土木・建築で、非常に特色のある学科でございますので、そのへんのところをよろしくお願いします。

以上です。

(池上委員長)

ありがとうございました。

実は、委員長の腹はそういうご議論は当然あるというように思っておりまして、どちらを優先するかということもあるのですが、恐らく、個別の高校数がそこそこ決まらないと次の議論に進ちょくしないだろうということがありまして、加えて、県教委の案をそのまま全日制というふうに当てはめていきますと、諏訪が9校、上伊那が6校、下伊那が7校という数字で、そうだから3管轄から見れば、これはしっかり議論をしていただきたいですね。それで、そのこのところはそこそこのコンセンサスを取っていかないと次に進まないと思っておりますので、その議論もあえてさせていただきたいと思います。

それから、私が書いた簡単なレジюмеでございますが、今の熊谷委員のお話することはもっともですから、ここは個別の学科の配置を書いてございます。これは職業科が書いてございます。なるほど、こういうふうな配置かと。これは今のお話のように歴史もあるでしょうし、その他の客観情勢もあるのでしょうか。こういう配置がいいかどうかだと。また、この内容がいいかどうかという議論には、次には大きな問題として「魅力」という世界も見えてくると思いますし、また今度はその方法論になりますと、また目標になりますと、小林委員のご発言のようなところに当然抵触するというように考えておりましたので、そちらのほうにいきたいとは思いますが、当面3地区で、どのような配分を

数の上でやるかというところで、この前で諏訪は治外でないというように結論をいただいておりますので、そういう方向で、今日はそこのところをもっとつめておけないかという方がありましたのでいいご発言をいただきました。そのように私は思っております。

（小坂委員）

ちょっと県教委に聴きたいのですが、『最終報告書』資料の 12 ページです。ここでいきますと、第 7 区と第 8 区で実際に比べてみますと、卒業生が 100 人しか変わらないのですね。諏訪が 1,900 人、旧第 8 通学区は 1,800 人。100 人しか変わらないのに、クラス数では 43 クラスと 34 クラスと、9 クラスになっています。この募集学級数というのは、どういう試算をしてあるのですか。これは平成 17 年度までは実際の募集学級数であるというように書いてありますが、平成 18 年以降は何を基準として募集学級数にしてあるのかを教えてください。

（池上委員長）

ではお願いいたします。

（柳澤教育主幹）

はい。今の資料編の 12 ページの表の下のところの（注 3）に、「学級数は公立高校についてであり、平成 14～17 年の中学校卒業者と募集定員の割合の平均により推定している」ということで、ちょっとこれだけではお分かりにくいと思いますので、若干ご説明させていただきます。

募集定員の決定といえますのは、毎年いろいろな要素を勘案して教育委員会で決定をしていくということで、毎年その翌年の募集を決定しているわけですが、その決定の要素としましては、ひとつは中学校の卒業生の動向でございます。どういう人数の卒業者がいるかと。それから、そういう中で全日制への進学希望、進学率というものはどうなっているのかという推移を見ております。さらには、いわゆる高専でございますが、高等専門学校への入学者、それから県外への進学者も毎年の動向を見ております。さらには、各種専修学校への進学者、定時制・通信制への進学者、自律学校高等部への進学者、就職者、家居、その他といったもろもろの動向を見まして募集定員の決定をしていくわけでございます。

それが平成 17 年までのその下にある学級数、例えば第 7 区ですと、平成 17 年度は 46 学級の募集定員ということになっておりますが、この平成 17 年までは決定した現実の数字でございます。平成 18 年以降は、平成 14 年から平成 17 年の平均をとりまして、それをもとに推計しているということでございまして、ちょっと計算の仕方が細かくなっていけないのですが、そういうすべての要因を勘案してということでございます。

（小坂委員）

分かりました。私は、何か方式があつてなのか、だからあくまでこれは推定に過ぎないということですね。

(柳澤教育主幹)

そうでございます。

(小坂委員)

平成 14 年から平成 17 年の傾向を、これに当てはめてみたということに過ぎないわけですね。そうですね。

(柳澤教育主幹)

はい。

(小坂委員)

だから実際問題、例えば具体的に、それぞれの旧通学区で中学生を受け入れるという基本的な姿勢があれば、この 100 人の差というのはこんなクラスの差にはならないという理解でいいですね。ですから、あくまで今までの傾向の中で推し量ってみるとこういう学級数になるということで、あくまでそれは推定に過ぎないということですね。それでいいですね。

(柳澤教育主幹)

はい、推計値でございます。私どものシミュレーションの考えでは、恐らく、この平成 18 年は来年のことで、例えば第 7 区で 43 学級、第 8 区で 39 学級となっておりますが、これが決定数値と思われるとちょっと困るわけですが、今までの考え方で募集定員を決定していった場合には、恐らく、そう大きな誤差がないシミュレーションであろうということです。

(小坂委員)

はい、分かりました。

それで、議論に戻りますが、第 7 通学区と第 8 通学区はたった 100 人の差しかない。しかしクラス数では 9 クラスという大きな差があるということの中で、きっと県教委が第 7 区については現状維持という結論を出したと私は思うのです。

しかし、私は、全体的に見ますと 100 人しか違わなくて、しかも県立の学校が諏訪には 9 校、そして第 8 区が 8 校、第 9 区も 8 校ということの中では、やはりそれぞれたたき台にすべきではないか。特に上伊那の場合は、先ほども言ったように 2 校がなっているわけですが、これについてもいろいろ異論もあるわけでございますので、やはりそれぞれたたき台に乗せて、1 校ずつを当面減らすような形の中で考えていく必要があるのではないかなと思っておりますし、しかも岡谷・諏訪の委員さんが過半数を占めておりますか。そんな中で、私はそれを了解していただければと思っています。

(池上委員長)

ありがとうございました。

岡庭委員、この点はいかがでございますか。

(岡庭委員)

ちょっと意見はございません。

(池上委員長)

そろそろまとめの方向に入ってよろしゅうございますか。

(藤本委員)

確か私の資料で、後でもいいのですが、たぶん関連づけてと思いまして。いいでしょうか。

私の出した資料は、都市部の進学校、伝統校が全く検討の対象外でいいのかという資料なのですが、そのところで、勝手に2016年度、平成28年度のクラスはどうなるのかと。県教委は、(第7通学区が?)47クラスと、第8区は37クラス、第9区が36クラスという推定なのですが、それでは具体的に各学校がどんなクラスになるのかと思って簡単に推定してみました。そうすると、たぶん地域高校ではもう11年後ですから2学級かなというのが条件と、総合学科を、県教委のたたき台を基準にしてつくりましたので、一応6クラスということをしてたたき台でちょっと推定しました。

そうしてみますと、第7区というのはほとんど6クラス、6クラス、6クラスと。ところが、第8区と第9区へいきますと、9クラス、8クラスの高校がたぶんできるのではないかなと。ということは都市部進学校で、かなりの大規模校が第8区はできるのではないかなと、ちょっと参考までに。

ただ推定ですので、そのようなものがもし参考になればと思ってちょっとだけお話ししました。

(小林委員)

これは非常に意外な資料で、ちょっとびっくりしたのですがね。先生、もう少し第8区、第9区の進学校中心に大規模化してしまう、また9学級なんていうのは、今の子どもたちの状況でいえば絶対に無理だと思っておりますので、ちょっと教えてください。

(藤本委員)

すみません。ちょっと関連するかと思って、短時間で言ったわけですがけれども。平成28年の2016年度は、第7通学区が47クラスで出ているわけです。それから第8通学区は37クラス、第9通学区は36クラスという推定の学級数が出ているわけなのですが、それではということで、勝手に私が独断で、たぶんこの学校はこのくらいかなということですので、別に9クラスが8クラスになるかどうかは分かりませんが。

例えば現状から言えば、辰野は、地域の状況やいろいろ見れば5クラスぐらい、それから上伊那農業は、設備的にも農業ということであれば4クラスだと。高遠は、地域高校といういろいろな困難さや減少等をみれば2クラスかなと。それで37クラスだったら、学校の収容からいけば、9クラス、9クラス、8クラスか、それとも、ちょっとまだ辰野に確認してないのですが、辰野の設備状況からいって辰野が7クラスとか8クラスになるのか、私も確認してないのですが、辰野が8クラスになればこれがちょっと減ると。辰野の

8クラスがどうかというのも勝手な推論です。

これを見ますと、9クラス、8クラスというのが5校になって、7クラス校はゼロなんです。あと、5クラス、6クラスになるわけで、旧通学区ごとのバランス、それから第3通学区全体のバランスから見ても、要するに伝統進学校というのはこういう状態でいいのかなと。ただ、数値は私の勝手な数値ですので、別に辰野は5クラスではなくて、6クラスだ7クラスだということもあるとは思いますが。

（池上委員長）

よろしゅうございますか。これは、ひとつの考え方ということですね。

諏訪の委員の皆さんで、特にご発言はいかがでございますか。ほかにございますか。

熊谷委員、今の、それでも諏訪の1校減ということについていかがにお考えですか。岡庭委員はちょっと意見を差し控えた、十分ご意見があるのしょうけれど。控えないで。

（熊谷委員）

私も状況をよく把握しておりませんので、発言を控えたいということです。

（池上委員長）

そうしますと、上伊那関係はだいたい、あと、北原秀樹委員いかがでございますか。この件につきまして。

（北原秀樹委員）

ちょっと難しいので、なかなか言うことがないのですが、今、藤本委員さんが言われたように、将来的なことを考えると、クラス数がやはりこういう形になっていくのかなということは思います。旧第8通学区というのは、やはり中学校でも、もう大変で、大規模校というのはそれなりに問題を抱えてしまいますので、高校は余計大変ではないかなということをお思いますので、もう一度全通学区を含めて考えてもらえればと思います。

（池上委員長）

ちょっとすみませんけれども、結論が分かりませんが。どういう方向で。

（北原秀樹委員）

ほかの地域のことがよく分からないのでいけないのですが、上伊那としてこういう大規模校ができることについては反対だということで、もう少し、どこを統合したり、どこを少なくしていくかということをもう一度考えてもらいたいなということをお思います。

（池上委員長）

当初のお話で、方向としてはどの基点から議論するかということなのですが、子どもたちが急激に減少するという事態に対して、先ほど関委員のほうからご発言がございましたが、いよいよクラスで対応できなくて学校で対応するという方向でございますし、そこその規模がないと学校として体をなさないという側面もあったり、パー・ヘッドの費

用等で考えていきますと、財政的には小さな規模の学校ほどお金がかかるということがございまして、少なくとも当地区においては、3校くらいは減をするというのは、ある意味では当然なのかもしれません。従いまして、その中で、さすればどこがどのくらいの負担をするかということについて、今日は議論をしていただいたということでございます。

上伊那関係の委員からは、諏訪は1校減と、まあ1校か2校かは別にして、とにかく減はするべきであるという方向に意見が動いていると思いますし、諏訪の皆さんの中にも、合理的な考え方であればそういう方向だというご意見もかねてからございましたので、委員長とすればそういう方向でぜひご検討いただきたいと思います。

そういう中で、熊谷委員がご主張のように、将来の議論の方法としては、他の地区のことは分からないので、ではそこところでまたグループの議論としましょうかと、またそれぞれの利害がございましょうから、そういうことでご意見も提出しましょうかというような状況だと思いますので、そのへんを勘案して結論をいただきたいということでございます。

(熊谷委員)

今、学校数の話が委員長さんから出ましたが、ぜひそれと合わせて、県教委の言っております4通学区に総合学科なり多部制を1校ずつ設けるというものについて、県教委は第8通学区へ多部制、第9通学区へ総合学科というような配置にしていましておりますけれども、こういう配置が適切なのかも含めて、ぜひ議論をしていただきたいと思います。

変な話、第9通学区では、総合学科は要らないという声が圧倒的にあるものですから言っているのですが、かといって多部制が箕輪でいいのかという、この間の9区か8区ということではありませんが、箕輪に置いたならば、伊那松島から富士見だというように、実は飯田なり天竜峡はどうなるんだという議論もあるわけでありまして、やはり校数の議論をするのであれば、そのへんもトータルとして議論があってもいいのではないかという気がいたします。

(池上委員長)

当然のことなのだと思いますけれども、やや乱暴のそしりは受けても、先に少なくとも合意ありきと。次に、では今のお話の総合学科についても、多部制・単位制についても、とにかく次のステップでやっていこうではないかということに相成っておりますので、先にそちらの結論をいただいておりますということがございます。

(小口委員)

先ほど大規模校の話がありまして、藤本先生のこの表は、大変興味深く拝見したのですが、私のような工業者から言いますと、先日も言いましたけれども、やはりこれからは種々雑多ないろいろと多面的に考えられる子どもだとか、新しい発想を持った子どもを育てるという発想からいくと、やはり子どもが多くの選択肢を持てるという学校は絶対つくらなければいけないと思います。そうすると、例えばある程度の大きな学校をつくって、その中でいろいろな選択肢の中で授業が成り立って、それで子どもが育まれていくという環境

を整えたいわけです。

例えば、私の娘がアメリカに留学しておりましたが、アメリカでは学校は2,400人の高校でして、そうすると1学年が700人もいるのですね。それで、しかもいろいろなコースを選択して、つまり選ぶことができます。これは彼女にとっては非常に「魅力」だったんですよね。しかも、行くことが非常にうれしいわけです。自分で選択できるわけですから、自分の好きなことができます。

そういう意味では、私はある程度、大規模校というのは悪くないのではないかと考えていまして、例えば県の資料で、入学者にかかわる各学校の募集定員とありますが、長野県でも上田高校は360人の募集をしているわけです。ですから、この上田高校が全然うまくいっていないというのは、私はそうは思えないのです。むしろ、上田高校はなかなかこのごろいいように思えておりまして、ですからそういう意味では、第8区、第9区はうらやましいわけでありまして。第7区は残念ながら6学級ですから、ちょっと残念なのですが、そんなふうに思います。

（池上委員長）

ありがとうございます。

丸茂委員、いかがでございますか。

（丸茂委員）

私も、かねてから学校数のことについては、第7区に関しても考えなければいけないと、思っただけで考えているのですが、今の時点では何もお話しすることはございません。

（池上委員長）

はい、ありがとうございました。

まとめに回る立場の笠原委員に、異議がございますか。これは、今度は我々がまとめという立場になると思います。

（笠原副委員長）

学校の規模というのは、やはりあまり小さくてもいけないし、かといって9クラス、10クラスというようなあまりの大きさになっても、これはまた考えものだなというように思いますが。第3通学区全体として考えれば、やはり諏訪も一応は考えてみなければいけないのではないかと思います。

それから、藤本委員のこの表を見せていただくと、第8区は9クラスなんていう数字が出てきますけれども、これは他通学区への流出とか、あるいは私学へ行くという数字は入っていないわけですね。

（藤本委員）

あくまでも県教委のこの37学級という数でいったら、各学校・・・

(笠原副委員長)

子どもの数で割り振ったということですよね。だから、私学へ行く子どももいるし、他通学区へ流れる子どももいるし、そういうことを考えると、実際問題はこんなにはならないと思いますがね。今まで、かつて9クラスという学校があったことがあるのでしょうか。私の経験では、8クラスが最高だったかなと思うのですが。やはり、8クラスでも大変は大変だと思います。当時は、50人学級の8クラスというような時代でしたから、今はそれとは比較にはならないかもしれませんが、9クラスということになると、これはちょっといかがなものかなというようにも思います。

そういうことも考えられないこともありませんので、やはり第3通学区全体として、こういう突出するようなことがないようなことを考えれば、諏訪も含めて考えてみる必要があらうかなというようにも思っております。

(関 委員)

学校というのは、ある程度の規模がないと活力がないということが「魅力ある」の根本にあると思いますが、この藤本委員の表ですと、地域校は全部が2クラス規模の学校になっている。地域校をなぜ2クラスにしてしまうのでしょうか。私も地域校に在職したことがあります。やはり4クラスぐらいは必要なのだと。そのくらいの規模がなければ学校の活力がないと思っております。

(小林委員)

いいですか。

いわゆる進学校が9クラス以上、9クラス、8クラスになるか否かということは、ここで大いに論議してもですが、とにかく大規模校になりそうだということははっきりしていると思うのです。例え7クラスだったとしても大規模校ですよね。

県教委では、今まで、地域高校は2学級でも仕方がないが、5.5クラスとか平均とかを出したのですが、どのくらいの規模までならいいのかということは何も示してないですね。

やはり、私は、ちょっと小口委員さんとは意見が違いますが、小口委員さん言ったことも大変よく分かるのですが、アメリカの場合でどうしてああいうことが成功できるかといったら、アメリカと日本の文化は全然違います。アメリカの場合は、すべて個人の責任です。ところが日本の場合は、そういう流れできているけれども、実際には集団の中で育てざるを得ない状況です。いくら進学高校でもそういう風土は今後も変わらないと思います。

その上で、今、確かに地域高校とかというところで心配な生徒が出てきている。これは今までもそうですが、これからの流れでは、学力の高い子も問題行動を起こす可能性が、今ものすごく出てきておりますよね。だから、進学高校はいくら規模が大きくても大丈夫だということは絶対にはないと思います。だから、ある程度の規模は、現状から考えたときに、ある程度とはどのくらいまでならいいかと。7学級までならいいかというあたりは、今後検討していく必要があるかなと。こういう可能性が出てくるものですから、お願いします。

(池上委員長)

ありがとうございました。

今後、議論が、先ほどのお話のようにいよいよいわゆる「魅力」論に入ってまいります。そこで結論を一気にひっくり返して、ある意味ではそういうご意見も必要だと思います。そういうまとめ方もいいと思いますが、その議論を変更でいくという立場で考えても、各地域で1校という対象の合意をしていただきたいというふうに思っておりますが、その点はよろしゅうございましょうか。

(関 委員)

各地区で1校減というのは、最初に枠を決めてしまうのでしょうか。

(池上委員長)

そういうつもりでいます。だから、今申し上げたように、完全にそれを根底からひっくり返すような結論に到達するようなご議論があって、それはしかるべきという時には、それはまた検討しなければいけないと思いますが、基本的にはそういう姿でいきたいと思えます。

いかがですかね。

(関 委員)

諏訪地区だけでいえば、この藤本委員のシミュレーションでも6クラスになっておりますし、それから平成17年と比べてクラス数も減っていませんので、1校減というのはいかなものかと、私は思います。

(小池委員)

私も関委員の考えに、原則に賛成です。

それで、「魅力ある高校」という問題もありますが、基本的に財政的な対応云々を横に置いておくという話なので、難しい面もあると思います。確かに大規模校で云々という論もあるわけではありますが、前提として、子どもたちがそれだけ活躍できる場づくりを進める考え方で、諏訪はきているわけです。現状で行って諏訪はいけるのではないかと思います。

それと、ただ諏訪だけ別物ではないぞ、という感情論をここで持ってこられると、非常にこれは厳しいものがあります。

以上です。

(小坂委員)

学校長は、それぞれの代表とすれば、地区に帰って、「なんだ、お前たちは、諏訪もたたき台に賛成したな」と言われかねないですが、私はそうではないと思うのです。総体的に第3通学区というのは、それぞれある程度孤立をしていて、非常に地理的にもいろいろな面で、ほかの地区と違って制約がある。

例えば、信越線沿線などはどこへでも通学できるわけですがけれども、ここはそんな状況

にはなっていないわけですから、そうした面から言うと、少なくとも、ではこれからの将来として、もうこれから全入の時代に入っているわけですから、それぞれの地域でそれぞれの地域の卒業生を立派な高校教育を受けさせようということが、私は基本だと思うのです。それは県教委も、決して否定しないとおもいますが。

そういうことから言うと、たった 100 人でこれだけの差がつくということについては、私が上伊那だから言うのではないので、それは全体から見て、それなりの 1 つずつ検討しようではないかということ、ここできちんと決めていただければ、もっと議論が深まると私は思っております。

(岡庭委員)

私は、すみませんけれど、委員長の考えにはあまり賛成できないのですが。

最初に 3 校ありきという話は、非常に無理があるように思っています。ということ、今は上伊那と諏訪、第 7 通学区と第 8 通学区の比較の話が出て、2 対 0 はおかしいのではないかと、これは全くそのとおりだと私も思っているのです。それは、いわゆる削減をする学校に対する考え方が全く違うわけです。

私は、上伊那の削減は、まさに専門高校を狙い打ちのひとつのことで、職業高校をどうするかという県教委のちゃんとした考えのない中で、この間藤本さんのお話の路線の中で、こういう方向で 2 つあるから 1 つだけを減らしたらどうかと。

多部制・単位制高校といっても、本来は多部制・単位制高校でなくて、これは定時制高校の受け皿としてどうしたらいいかという議論でしかないわけで、本来は、多部制・単位制高校というのは、もっと積極的な部分というのがあるわけだと思うのです。かつて私のところで、神奈川県の子どもたちがホームステイに来てくれましたが、非常に自主的、自発的に学習意欲をそれなりに持っている。そういう高い目的を持った多部制・単位制高校の子どもが来ました。受けた家庭の皆さんも、「子どもたちがちょっと違うな」という印象を得た子どもたちが来たわけですから、この多部制・単位制高校を定時制高校のといいますか、居場所づくりという形で考えられているところに、私はもう無理があると思っています。

それから、諏訪の問題というのは、確かにいろいろ議論をお聞きしておりましたけれども、やはりさすがにそのとおりかなと納得できるものがあるので、ここで 1 校を減らすことが本当に理屈に合うのかどうかということから考えると、どうも減らすことに私も結構でございますというような意見にはならない。

特に、上伊那の 2 校を減らすということについては、私もちょっとこれは、箕輪地区の工業が盛んところであるということから考えれば、そういう中で果たしてきた箕輪工業高校の役割ということから考えれば、これをなくしてしまうということが本当にいいのかどうかという結論はでない。

もう一つ、先ほど関先生のおっしゃった学校規模の問題からいえば、下伊那が一番問題なのですね。特に地域高校が 2 つある。それから、松川高校があるというようなことで。確かに、人口動態を、この間委員長が下伊那は特に急激に減るとかという話を聞いて、私もこれを全部調べたのですけれども、飯田市の子ども数の減少率は非常になだらかなんですね。しかし、周辺部と山村は、もう子ども数が減ってしまっていますから、あまり数字

には影響してこないのですが、周辺の町村が非常にまだらなのでなってくるわけでして、そういうことから考えると、規模の問題からいえば、第9区が非常に大きな問題だというように思っているのです。ここのところの議論ということがされないで、3通学区に1校ずつ減らせばいいのではないかという話には、たぶんならないのではないかと思います。

委員長がこの前から言っているように、この第3通学区で基本的に考えなければならぬところのひとつは、みんなもうちょっと「魅力ある高校づくり」という点で議論をした暁でないと、学校の数減らすというところで議論することについては、非常に危険性があるし、議論へ参加がなかなかできないなどと私は思っているわけです。

総合学科の問題について藤本さんがおっしゃったように、学校教育法でいうと、そもそも総合高校をつくるのが高等学校教育なのだと思っているわけでして、際だって進学だけ考えて、地域のことや職業のことを考えないような高等学校は、本来は高等学校としての言ってみれば素質に欠けるわけで、こういう問題も含めてちょっと議論をしないとまずいのではないかというのが、私の今のところの意見であります。

（池上委員長）

ちょっとお伺いしますが、そうしますと、場合によれば3校を減らすということの方向というのは、先にありきではないということをおっしゃっているのですか。

（岡庭委員）

私はそう思っています。

（池上委員長）

そうしますと、例の『最終報告』だとか候補案に近いところの意志というのは、尊重できないということに相成るわけでございますが。

（岡庭委員）

全くそのとおりでして、前にもお話ししましたように、なんら県教委の出したこの案には理念もないし、長野県教育をどうしたらいいかという発想もないと思います。

特に私が言いたいことは、41パーセントの子どもが現在の高等学校教育について行けないところを考えている。その子たちをどうするかという。そして、やはり途上高校といわれるところは、15人とか20人とかの小学級をやってはじめて授業が成り立っているという実態の中で、40人学級をあくまでも考えて、そして数を歩み寄ってくるのではなしに、もし本当に考えるのなら、30人学級とか15人学級だとかということもして、本当に中学校から分数の分からない子どもたちが出されてくるわけです。そういう子どもたちをどうするのかということを考えると、長野県全体の、その子たちが、優秀な子たちはみんな東京へ行っていて、学校を出て東京で住むわけです。そういう本当に努力して学校を卒業した子は、地域に残るわけなんです。本当に、地域全体がその青年の学力を上げていくことをするためには、そういう子どもたちにしっかりした学力をつけて地域に出していかなかったら、地域は継続的に発展しないし、その周囲の工業も、商業も発展するということはないのです。人材がなくなるわけですから。

そういうことを考えた場合に、ではどうしたらいいのかということが、村の中で青年を見ていまして、私自身は非常に大きな課題です。そういうことについて、今回の改革案は、全く学校数削減ありきであって、これに乗って議論をしたのでは、長野県の100年の教育に対して禍根を残すことになると思います。

（池上委員長）

今のご議論でございますと、ずばり言いますと私の任には耐えません。それはプロたる先生方の集団で営々と議論がされてきて、ここで3カ月か半年ぐらいでその議論を固めろというのがだいたい無理な話だと思いますので、それはごめん願いたいと思います。それはあとで、また教育委員会のほうからご発言をいただきますけれども、そのように私は思っております。

（小林委員）

ちょっと進め方の件ですが、私は、今まで紆余（うよ）曲折があったけれども、今までの流れを大事にしながら積み重ねてやっていかないと、もうあっちにいたりこっちにいたりして、何のためにこうやって会議をやっているか私も本当に憂うつになってきますので、ぜひ今までの積み重ねの方向でやっていただきたいと思います。

その1点は、先ほど出た諏訪をどうするかということ。確かに私も言い方がちょっと悪かったのですが、諏訪も1校を減らせという議論は、ちょっと乱暴だったなとも私も反省しております。ただ、逆に、諏訪は今1校を減らす必要がないよという意見も乱暴な意見だなと思います。たったわずかな議論で、諏訪は必要がないなどということはどうして結論できるのかと思います。

我々がやってきていることは、検討をするということです。1校をとにかくまずここを減らすかではなくて、例えば、諏訪も本当に再編したほうがいいかどうかを検討していくためにこういうことをやっているのです。1校を必ず減らすという視点ではないと思うのです。今まで来たのは、従って、上伊那だって検討していった結果、我々の議論としてどうやっても再編にはつながらないという結論が出る場合だってあるかもしれない。それは、努力はしなければいけないと思いますが。

あくまでも手掛かりとしてそういうことを示したので、ここで、いや諏訪は今、対象の必要はないよという結論も確におかしいし、1校というように決めてしまうのもおかしい。しかし、それぞれの地区で検討していくべきです。さっき熊谷さんが言ったように、ここで全体でやるというのは非常に難しいということは私もよく分かります。だから、その各地区でグループをつくってでもどういう形でもいいのですが、そのための今の話だったと思うので、諏訪はもう必要ないよというのはちょっとまずいかなと思います。

もう1つ、その各地区で検討する前提がどうしても必要かなと思います。それは、さっき言った総合学科は本当に必要かどうかということと、多部制・単位制が本当にこの第3通学区に1校がぜひ必要かなという、いや2校必要ということもあり得ますよね。その話がはっきりしないでおいて各部会で検討は難しいかなと思いますので、共通する事項について、ここでとにかく積み重ねておいて、各部会で検討するというように持っていっていただきたい。

以上です。

（池上委員長）

よく分かりました。お説のとおりだと思います。ただ、私とすれば、さすればその各地区に持ち込んで、それぞれの地域が変更ありきではないという結論をいただいても、これは結論にならないなということがありまして、客観的に見て各1校ぐらいお願いするということが必要ではないだろうかと思っております。

ただ、先ほど申し上げました、今小林委員のおっしゃるように、あらゆる条件を検討した上で、それは3通学区を含めて違うコンセプトを構築すべきだというような結論になるということで、なるほどということなら、それはそれでまた元に戻せばいいわけで、まだ結論がついたわけではないわけですから。そういう方向でお願いしたいのですが。

懸念をすることは、もう賢明な皆さんのお集まりですから、それぞれのまたお立場もあると思いますが、諏訪は別格らち外ということは絶対私は譲れないところでございますので、それだけはひとつよろしくお願いしたいと思います。

従って、そここのところの結論は、そういうほうに申し上げれば諏訪も1校ありきというふうに思っておりますので、そういう方向でお願いをいたしたいと思います。

それでよろしゅうございますか。

（小池委員）

ちょっと待ってください。

（池上委員長）

はい、どうぞ。

（小池委員）

1校減とかそういうことではなく、諏訪も討議の中で、よりよい高校づくりのためにひとつ考えていきましょうということですよ。

（池上委員長）

そうですけれど、最後にいって、また皆さん地区にお帰りになってから「俺んちの地区は」という話になった場合には、では上伊那が2校で、下伊那が1校で、諏訪がゼロという話は通らないということになりますので、それはまとめになりませんから。

ただ、その議論を突き破るようなお話ができるのなら、それはまたそれで結構でしょうということで私は思っておりますので、そここのところは、先ほどの小林委員のお話ではないのですが、この議論どうしてもブレるのが当たり前だと私は思いますが。基本的に「魅力」論に入って、そここのところそういう議論が出てくるということなら私は結構なのですが。

今日現在、この時点ではそういう結論でやらせていただきたいということでございますが。

(小池委員)

委員長の言われている意味がちょっとよく分からないのだけれども。要は削減1校ありきということなんですか？

(池上委員長)

それは、今はそういうことですね。ないとすれば、ほかの地域もないという話になると思います。では、大規模校の話だとか、財政問題とかいった場合に、どのようにつなげるかということになってまいりますので。それはそういうことにしたいと思います。

大変難しいところで、先ほどの岡庭委員ではありませんけれども、「意見がありません」と、意見があるわけですが、意見が申し上げられませんかというお立場だと思いますので、それはそれなりに理解しておりますが。そのようにお願いしたいと思います。

(藤本委員)

結論が出たわけではないのですね。1校減に。1校減を頭に置くんだと…。

(池上委員長)

そういうことですね。そのところをすっぱり言ってしまうというのは、大変難しいと思うのは当然そうです。しかし、そういう方向でやっていただかないと、最終的にはまとめにはならないだろうということなのです。

本当は、会社のごとく、軍隊のごとく、これが方針だと言えいいのですけれども、この集団はそうもいくまいということでございます。

(小池委員)

確かにそれは、小林先生が言われたように、特に検討していて結果がそうなったというならいいのですが、前提が、そういうことが先にありき、というのはどうかと思うことと、県のたたき台で出された学校と、今日諏訪で出た学校は、校種も違いますよね。だから、職業科での特色ある学校と、普通科における特色ある学校とは違うと思うのです。そういうものが一緒くたになされていて、諏訪も俎上(そじょう)に乗って一緒に考えましょうということは、おかしいのではないですか？同じ天竜水系ですから、天竜川も諏訪から発しますので、諏訪も、それでは一緒に考えましょう、ということならいいのですが、おい、諏訪はこの普通高校の3つから1校を減らせよ、というのが前提だと言われると、これはちょっと飲めないということですよ。

(池上委員長)

それは、そういうことではないでしょう。少なくとも学校数として、そういう方向でご検討いただけませんかということではよろしいのではないのでしょうか。そのように思っています。首をかしげるところはたくさんあると思いますが、まあ、そこは言内の意をくんでいただいてそういう結論にさせていただきたいと思います。

それでは、時間に助けられるわけではありませんが、ちょうど11時に10分前のございますので、11時から再開したいと思いますので、休憩を10分間いただきます。よろしく

お願いします。

【休憩後再開】

(池上委員長)

それでは、時間がまいりましたので継続したいと思います。

言内の意をくんで、これからいろいろご議論をしていただいて、また対案を出していただいてということを含みとして持ちながら、先ほどの結論でいきたいと思います。

それでは次に、いよいよ仕分けをいたしますと、まず職業科の問題でございます。その点と、それから小林委員からも出していただきました、今度はどういう子どもたちをつくっていくか、その方法をどうするかというような世界の詰めだと思いますが、そこに過半の時間をとっていききたいと思います。よろしくお願いいたしますと思います。

ちょっと私の書きましたこの資料の表を、これは1枚資料で、裏に校別学科配置という職業科が書いてございますので。先ほど北原委員のほうからも先般来からご指摘ありますが、例えば工業系をどうするのか。当然、同じように商業系もございましょうし、農業もございましょうし、その他もございましょうし。また、社会的な要求からみれば、新しい学科等も当然入れていただくというような希望も出てくると思いますので、そのあたりの語りをお願いしたいと思います。

それでは、工業から、特に小口委員いかがですかね、工業系についてご専門の立場からご意見がございましたらお願いしたいと思います。

(小口委員)

先日も申し上げましたが、諏訪地域は大変工業が集積しておりますので、これはやはりそういう部分ではもうなくてはならない。それから、諏訪実業、富士見につきましても、先ほど県のほうから中学生の進路希望の調査がありましたけれども、結構募集人員に対して人気があるのです。諏訪実にしる、それから富士見高校にしる、募集を上回る人気があるということは、やはりなくてはならない学校になっているのだなという気がいたします。

そういう観点から見ると、箕輪工業の人気度というかはちょっと低いというか、募集に満ちていないという状況はあるようではありますが、現状の伊那地域の工業の集積度を考えると、やはり工業系が何もなくなるというのはちょっと寂しいなという気がいたします。

学校の設備的にどういうことが考えられるかということもありますけれども、ただそこをどのように総合学科でフォローするかということも考えられる。ただ、総合学科は県の案では飯田地区ということですから、そのところをどのようにフォローするかということは重要ではないかなと思います。

(池上委員長)

北原曜委員、いわゆる、今度は普通科偏重という話が先ほどございましたが、職業系はいかがですか。特に工業系は。

(北原曜委員)

はい。

工業系については、諏訪地区では岡工がありますし、それから上伊那では箕工と駒工とがあって、下伊那では飯田工と長姫とありますけれども、総合工学という、ちょっと私もいろいろ要覧を読んでみたのですがいま一つぴんとこないのですが、それからあと募集に満ちていないということもありますので、これはやはり考慮していかななくてはいけないところかなと思っています。

ただ、各地区に工業高校は最低1校は必要かなと、特に、諏訪、上伊那、下伊那とも工業は発展していますし、それに今、これから産業を伸ばしていかなければいけない分野でもありますので、このへんは統合するにしても考慮していかななくてはいいかなと思います。

(小口委員)

ただ工業でこのごろ言えるのは、やはりあまねくどの地域も工業というのは大事なのですけれども、あまねくどの地域も同じようにバランスだけ見ていたのでは、工業というのは成り立たないと思うのです。国の施策では、基本的に活性化する地域へ予算を投入するほど成績が上がるのです。あまねく平等というのは駄目だというのが、もう流れになっております。

ですから、例えば、こういう子どもたちが就職していく先がこれからどうなるかという、いい地域はよりよくなると、悪い地域はまたより大変になる。こんな傾向が続くと思いますので、そういう意味で、県の施策の中でどのようにやるということはやはりあっていいし、そしてもちろん国の施策の中でそういう方向も出てきていいのだろうというふうにも思います。

(池上委員長)

この点については、事務局でご見解がございましたら、私のほうからもぜひお願いしたいと思います。

例えば、この岡工の中に生産システム、情報技術という2つの学科がございますが、その他、電気、化学は概念としてわかりますけれども、そのあたりは、どんな教科を採用しているのか、もしお分かりでございましたらちょっと教えていただきたいと思います。

また先ほどの施策の問題ですが、そこもどういう方向で対案があるのか。

(柳澤教育主幹)

その工業系の今の生産システム、情報技術科等についての中身の詳細につきましては、今ここで直ちにお話しできませんが、各学校の要覧がいておりますので、それらを参考にさせていただければと思いますが、また必要でしたら詳しい中身は次回以降お出しできるかと思います。

全体的なことでございますけれども、専門高校につきましては、『最終報告書』の13ページ、14ページのところに、「キャリアを拓く専門高校のビジョン」ということで、専門高校に対してのひとつの方針が出ております。この専門高校という呼び名自体は平成6年

に制度化になって、平成7年からだったと思いますが、今までの「職業高校」という名称から「専門高校」という名称に変わってきているわけであります。

それまでは、以前は職業高校に行けば就職する者が圧倒的に多かったという時代が長くあったわけですが、今現在は、14ページの上のところにグラフが出ておりまして、それぞれの専門高校からの、これは大学と短大に限ってでございますが、大学等の進学率がそのように大変高くなっていると。そのほかの専修学校等も含めると、もっと高い割合になるということになってきている。

そういう中で、ひとつは専門性にかかわる専門のさらなる深化というような部分と、もうひとつは、生涯にわたっての高度な専門教育を目指して進学をしていくという継続教育というような視点というふうに、現在は変わってきているということで、14ページに「今後のあり方」ということで、7点にわたって提言がなされているところでございます。

また、この専門高校の配置等につきましての基本的な考え方としましては、19ページ、20ページのところに、「専門高校の整備とキャリア教育の充実に向けて」ということで、「専門高校の整備」というところがございます。

先ほどもちょっと説明がありましたが、その円グラフになっております平成16年度全国と長野県の学科配置の割合が出ておりますが、これは平成16年度の生徒在籍数の比率でございます。先ほどの北原曜委員さんの資料の中では、特色学科、英語、理数科等を含めて普通科ということで、比率で出ておりましたけれども、この円グラフで言いますと、そういったものは「その他」のところに入っておりますので、普通科の比率が若干低く見えるかと思いますが、その他の欄に英語科、国際科、理数科、さらには体育科、音楽科、長野県でいえばそういう特色学科がその他の部類に入っております。もちろん長野県には水産とか、衛生看護科は廃科になりましたので今現在はないわけでありますが、おおむね全国的な水準にいつているかと思えます。

そういったこれまでの状況を考慮したりしまして、その下のほうにございますけれども、各通学区の中で専門高校の拠点化を進めていくと。各通学区というのは4通学区でございますが、4通学区の中で拠点化を進め重点的に支援をしていく。その他のものは、新しい発想で学科改編を進める、あるいは総合学科への転換というような大きな方針で進めていくということでございます。

（池上委員長）

ありがとうございました。

19ページの下から4行目の「各通学区の中で専門高校の拠点化を進め」というのは、「重点的に支援し、また、拠点校以外の専門高校について」は、例えば、認識としてはどういう形になるのですか。この第3通学区でいいますと、工業でいえば、どれが例えば拠点校で、その他の学校というのはどのようなイメージでとらえたらいいのでしょうか。

（柳澤教育主幹）

はい。この検討委員会のほうでは、総合学科と多部制・単位制高校については、各通学区に1校以上の配置が望ましいと報告をいただきまして、初回にお願いしました推進委員の皆さまへの検討依頼事項のひとつに総合学科、多部制・単位制の配置について、各通学

区1校ずつの配置をということをお願いしてあるわけですが、この専門高校につきましては、各通学区、例えば工業科なら工業科の拠点校を1校ずつとかいう具体的なところまでの提言に至っておりませんので、この候補案策定にあたりまして、一応のそういったイメージは持っておりますが、明確な形でここが拠点校という形ではお示ししてないわけでございます。

(小林委員)

委員長さんの出したこのことにかかわって、いいですね。

2つお願いしたいのですが、つい最近、上伊那も7団体の会議がありましたけれども、そういう話は出さないほうがいいと思うのですが、やはりそうはいかないのですが。特に、上伊那の工業高校がなくなってしまうということについての、これは地域で猛反対しているわけですが、お聞きするとつい最近のことですか、今上伊那は工業出荷額が、ちょっと詳しいデータは分かりませんが、もう長野県の中でたぶん松本がトップだと思いますが、2位になったと。

どなたもおっしゃっているとおり、非常に工業が盛んな地域になってきている。いろいろな理由があるのだけれども、そのひとつは、企業が進出する時に、「この近くに工業高校がありますか」ということですが、これがかなり大きな要素になっていたりというのが、今後なくなってしまうと非常に厳しいという地域全体にもかかわってくるということで、工業高校、ものづくりの拠点をなくすということには非常に強い反対があります。

従って、これは上伊那だけではなくて、長野県は、今後もやはり工業で生きていかざるを得ないということを考えると、金がかかっても工業高校だけは専門学校として大事にしていくべきではないかなと思うことと、農業高校ですが、私も学校へも行ったこともありますけれども、努力はされているがやっていることは実際にキャリア教育という点でいうと、いわゆる農業関係に就職する子が極めて少ないですね。そうした時に、このままで、上農も含めて残すことが本当にいいのかどうかということは、いくら食糧生産が日本で非常に大事だと、それは当然のことですが、なくしてしまうことには私は反対ですが、このままの形態でいいのかどうかということが、非常に問題があります。

それと2つ目ですが、総合学科について、県教委からいただいた資料を見ても分からないことは、例えば志学館は従来の農業科と普通科のある学校の中で行われましたよね。ところがさっき熊谷さんがおっしゃった、例の長姫と下農の総合学科はいらないという話ですが、これはもっと調べる必要があると思うのですが、総合学科がうまくいっているのは、もともとどういう科とどういう科がセットされた時にうまくいっているのか。例えば工業学科とのセットが一体可能なのかどうか。

長姫と下農の場合は、普通科は何もないのです。それで、この総合学科的なものにしていくというのだが、それが本当に全国的に見てどうなのかという、セットの学科がどうなっているかということをよく考えないで、総合学科はいい、いいというわけにはいかないなあということを強く思います。今後、そういう資料がぜひ欲しいなど。各県でどのくらい総合学科ができていう資料はありますけれども、どういう学科とどういう学科が1つに統合されて、例えば普通科単独でなっているところは、藤本先生がおっしゃっているように、ほとんど進学校がなっていくのですね。そういうことなのか、違う形になっ

ているのかということも、今後検討が必要かなということです。

以上です。

(池上委員長)

ありがとうございました。

ちょっとお待ちください。後ほどにします。

工業系の高校のご意見はよく分かりました。農業高校もそういう側面があることも、私もよく分かります。総合学科の、今の小林委員のご指摘に対して、ちょっと事務局のほうからお答えください。

(篠原教育幹)

はい、お願いいたします。

総合学科の形態は、今おっしゃられたようにいろいろな学科から総合学科をつくっていくと。これは全国でも種々ございます。

これは、基本的には確かに、例えば志学館が普通科、農業科、それから家庭科系の家政科と一緒にしてつくった。それから、全国的には、例えば工業系の学科を中心にしてつくったといういろいろございますけれども、しかしそのいわゆる専門学科に拘泥するという学科では、総合学科というのではないわけであります。つまり、それまでの伝統の中で培ってきたひとつの職業科に対する考え方、見方というものを、総合学科として新しく生かしていくということが1つ。

それからもう1つは、やはり全く新しい分野を総合学科の中に入れていくと。総合学科が、いったいどのくらいの分野、系列があるのが適当かというのは、その地域にできる総合学科の性格、その地域的な特色をいかに吸い上げた形になるかというところで決まってくると考えております。

従って、例えば商業と工業と一緒にしたから、必ず商業系、必ず工業系というふうに固定的に考えなくても、たぶん工業系も入るでしょうし、商業系も入るのでしょうけれども、しかし、他の学ぶ分野も当然入れていかなければ、総合学科としての魅力というものには欠けるということになってしまうということでございます。

それから、工業系を総合学科に入れた場合というのは、農業などと若干違う部分は確かにございます。というのは、ベースになる基礎的な科目はかなりきちんと修得した上で、さらに上に積み上げていくということは、より工業のほうが農業に比べますと色合いは濃いわけです。そうしますと、やはりある程度、半ば必修的なものもきちんと配置しながら、さらにその上に選択の科目をつくっていくということが、これはもちろん農業系の総合学科でもあるわけですが、より工業のほうが体系的にそういったものを考えていかなければいけないという面はあるかと思えます。

それから、ひとつ前に農業高校について出されたわけですが、先ほど説明がありましたように、やはり専門性と継続性という、まさに現在専門学科を考える場合に必要な2つのキーワードということになるかと思います。そうした中で、例えばこの地域で言えば、上伊那農業高校は専門性、継続性の、継続性のあたりもかなり視野に入れて、例えば4年制大学に進学といったようなところでも、当然農業分野に進学していくわけですが、活躍す

る人材をつくっているということが言えると思います。

以上でございます。

（池上委員長）

ありがとうございました。

この件につきましては、かなりいろいろ、まだ私にとっても勉強しなければならない側面もたくさんありますが、特に総合学科についてご質問が、関連してございましたらどうぞ。

（熊谷委員）

質問といいますが、先日も言ったかもしれませんが、県教委の案でも、第1通学区につきましては中野と中野実業が一緒になって総合高校というし、第2通学区は丸子実業が単独で総合高校への転換というように聞きました。第3通学区だけは、なぜか、小林さんもおっしゃいましたが、普通科がない2つの専門高校を一緒にして総合学科にするということですが。

ですから、私は、多様な総合学科のあり方は、ある意味であっていいとは思いますが、あえて第9通学区で、商業高校はさっきも言いましたように建築・土木といった特色ある学科を持っている学校と、農業高校というものをあえて2つを1つにして総合高校にするというのは、何かあまりにも違和感があるなという感じが正直していますので、総合学科高校そのものを否定するという気は、ひとつの志学館についても、私が言ったように肯定的な見方と否定的な見方と両方あるわけですが、あえて長姫と下農を統合して総合学科にするというものについては、第9通学区の中においては、ちょっと乱暴ではないかという議論がありますので、紹介していただきたいと思っています。

それから農業科のことが出ましたので、ぜひ私は、職業柄非常に関心があることでございますので、農業の位置付けについては、非常に新規就農者が少ないというようなことで、農業教育うんぬんということが言われるわけがありますが、農業教育は単純に農業だけにとらえる時代ではなくなっているというように私も認識しておりまして、例えば大学なりの教育でいきますと、まさに地域政策として農業をどうするかという議論が相当あるわけでありまして、あと食糧とか、いろんな分野で農業教育というのは広がってきておりますので、従来の就農するための農業高校という位置付けというものはだいぶ違う。それは、逆に言うと工業高校でも、商業高校でも、もう進学率が7割になっている時代でありますから、高校の教育で、要するに就職のための教育をするという位置付けからは変わってきているのではないかという気はしますので、農業も多様な意味での教育の場へいかざるを得ないと思っていますので、よろしくお願ひしたいと思っています。

（北原曜委員）

県教委さんにちょっとお願ひしたいのですが、その総合学科で、全国でいっぱいできていますけれども、その中で失敗例といいますが、あまりうまくいっていない例というのがいくつかあると思うのです。それは、前に藤本さんからそういうお話があったからと思うのですけれども、そういうあまりうまくいっていない例の原因といいますが、それは前

身となる高校がどういう組み合わせになっていたか、それから、それ以降どうなっていたかというものを、何か情報があればお願いしたいところなのですが。

（篠原教育幹）

成功、失敗というのが、具体的にどういうことを指してということは、いろいろ指標はあるだろうと思います。例えば、いわゆる志願倍率がかなり低落してしまったとかいうようなことがあるかと思うのですが、統計的にそういったものをまとめたというものは、今のところ資料としてはございません。

ただ言えることは、私は、総合学科というものを考えた時に、やはりここで塩尻志学館を紹介したり、あるいは塩尻志学館を評価していただいたりしているわけですが、どういう意識で総合学科を我々教員がつくり上げていくかということだろうと思います。

ちょっと気になるわけですが、例えば、非常に教育が困難であると言われているところを、総合学科にして新しくというような声も聞かれるわけなのですが、私はそれは非常に危険だなと。つまり制度が変われば、総合学科という形になれば、いい生徒たちが入って来て、そしていい教育ができるというふうに前もって思っているということは、幻想ではないかと思います。やはり、つくり上げる目的、そしてつくり上げた時に、どんな生徒たちを送り出していくかという明確な像をきちんと持って、そして取り組んでいくと。当然のことではありますが、そういったところがやはり成否を分けていく非常に大きな要因だろうと考えております。

（北原曜委員）

いいですか。

（池上委員長）

どうぞ。

（北原曜委員）

それで、志学館の場合は県内で1例という、成功していったと思うのですが、それは先ほどおっしゃったように地域の協力が非常にあったということ。それから初めてということで、先生方の意欲が非常にあったというようないろんなことがあるかと思うのですが、今回、例えば総合学科をつくるというのは、これはいわば強制的につくらされるわけですね。各通学区で。そうなってくると、地域の協力というの、反対はしつつ、いやいやという形で総合学科をつくらざるを得ないという場合だってあり得るわけです。現実には、旧第9通学区のほうで、あまり、難色を示しているのかどうか分かりませんが、地域としてはあまり歓迎していないような感じもしているのですが、そういうようなところで、無理やりつけるような形でやっていって、果たして成功するものだろうかという気がいたします。

いかがでしょうか。

(池上委員長)

どうですか。

(篠原教育幹)

塩尻高校を総合学科を転換するという際に、必ずしも地域の賛成があったというようには思っておりません。というのは、やはり塩尻高校というひとつの校名、さらにワインを製造しかつ販売するという全国でも非常にまれな学科を持っていたわけです。そういう中で、塩尻高等学校のワインというものが、総合学科にした場合に消えてなくなるのではないかという地元の方々の意見はかなりありました。

私どもは、当然、あれはワインという地域性があったからというより、むしろ塩尻高等学校がワインを製造し販売するという全国的なひとつの特色は残そうと、つまり総合学科の中に残していこうと。そういうふうに関心の方々に説明しても、総合学科になったらワインに携わる生徒数は減ってしまうだろうと。減ってしまえば、それまでの塩尻高校で誇っていたワインというものが、だんだん衰退して消えてしまうのではないかなというようにも言われました。

しかし、現実に関心かどうかといいますと、確かに、かつてのように1学年40人の人間がワインに携わっているということはありません。10人、あるいは15人と生徒数は少なくなっております。しかし、かつてと同じようにワイン製造を通して勉強している。また塩尻市から協力もいただいて、例えばフランスへ留学するといったようなことでその勉強を重ねている。つまり、教育の中身、質は決して落ちることはなく続いているわけです。

確かに地域の皆さんは、新しい学科ができるということになりますと、それまで伝統的な、言ってみれば親しかった高校の専門学科が全く衰退してしまうのではないかと、あるいは全く姿を変えてしまって、自分たちから遠いものになってしまうのではないかなといったようなことを思われるのは当然だろうと私は思いますが、しかし、学校をつくって、その中でその学校を成功させていくか、させていかないかというようなことになったときに、乱暴なことを言いますと、私は、地域の皆さんの最初の賛成、不賛成はあまり関係ないだろうと考えております。

つまり、生徒たちが主人公ですから、その1期生、2期生、3期生と次々に入ってくる生徒たちをどう教育していくかということで、地域の皆さんの信頼というものを得ていくしかない。これが、言ってみれば教員はそういう宿命を負っているものだというように思っております。

(池上委員長)

ありがとうございました。

さて、そのへんは随分議論がだんだん出てきたと思いますが、今の総合学科の問題で、ほかにご意見がございましたら、またご質問がございましたら、ぜひお願いしたいと思います。

(藤本委員)

私は、前回の資料も出しましたが、文科省は各通学区に 1 校の総合学科をつくる。全国で 500 校ですね。この方針で県教委自身も書かれているというところに矛盾があるのです。だから、画一的に通学区に 1 校だと。総合学科、今度は多部制もそうです。だから、総合学科の問題点は、やってみていいというのだったらべつに 2 つでもいいのです。悪ければゼロでもいいので。その画一性というところに問題があると思います。

さらに将来的には、この『報告書』にありましたように、通学区に工業高校は 1 校で、その拠点校化して、あとは総合学科に多様化もします。最終的に総合学科をどんどん増やそうという基本的な方針まで、前回は議論したと思っております。

先ほど拠点校化ということが話に出ましたが、東京都はすでに工業高校の拠点校化が実施されておりまして、拠点校だけに最新の設備が投入されまして、周辺の工業高校は、実習に行くときはもうバスなどで行くのです。最大 60 分自乗の駅から、私はちょっとデータを持っていないので、またデータがあったら。すでにそれが実施されている。だから、最新の設備をすべての工業高校に手配するのはもう無理だから、そこに生徒を行かせなさいと。それは他県の動きで、東京都はすでに実施されている。

総合学科についても、あくまでも地域の職業高校の専門性が求められてその専門性がされているのだったら、全国の状況を見ると、総合学科では苦しいなと思います。

確かに県教委さんが言われたように、ワインがありますよとかいろいろあるのですけれども、いろいろ見てみると、とかく専門系列に生徒は行かないのですね。やはり、総合学科にいろいろな系列があると、どうしても土いじりするところはいやだとか、実習をするところはいやだ、それよりもコンピューターで、きれいな空調の部屋にいたいという生徒が、どうしてもそうで、そこに不安を感じて。だから、全国の総合学科でも、ある程度コースごとに枠を決めてしまうというところが出てきてしまうのはそのへんも飲んだ意が背景にあると思います。

例えば、上伊那農業高校は、和牛の受精卵で、もう上伊那農業高校がなかった農家は困るのではないですか。それから、簡単に牛を飼えるキッドとかいうものをつくって農家に普及させている。だから、そういう地域になかったら、和牛の受精がなかったら、農家はもう牛が飼えないのですから。そういう職業高校の専門性というものは、さっき言った工業は、実習、次は授業、実習、授業と積み重ねですから、それをフリーに勝手気ままに単位制でやられたら困るわけです。商業の先生が、前にもちょっと言ったように、簿記を勉強しないのに何で商業簿記だと。こういう積み重ねというのを私は必要だなと思います。

(池上委員長)

今の点について、事務局お願いします。

(篠原教育幹)

それではお願いします。

例えば、塩尻志学館高校では、農業系の科目は、基礎的な科目からかなり専門性の高い科目までももちろん配置をしているわけですが、実際に農業系の科目を履修している生徒は非常に大勢おります。30 単位というのは 1 週間に 30 時間以上で、これは当然 2 年生、3

年生と振り分けられますから、30 単位以上ですけれども。この 30 単位以上を履修している生徒たちは、専門学科に劣らない履修の時間数ということになります。こういった 30 単位以上の履修をしている生徒から、2 単位、つまり 2 単位といえますと 1 週 2 時間の科目です。それまで合わせますと、人数で 540 名が農業系の科目を取っているのです。

これはいわゆる 30 単位以上取る、つまり専門学科に匹敵するだけの専門性を身につける生徒もいると同時に、農業系の科目の持っているさまざまな魅力、例えば環境に関する科目であるとか、あるいは食に関する科目であるとかいった科目、「魅力ある」科目を取る生徒もいるわけです。ですから、この土いじりがうんぬんという藤本委員のお話がありましたが、決してそうではない。やはり生徒たちは、総合学科というものの目的、そしてその中で基本的には 3 年間生活をしていく。そして進路を見つけていくという中で、どうしても将来的に自分が必要であるという科目については、農業科目であろうと何であろうと取っていくということでもあります。

ちなみに、例えば理系のいわゆる生物関係のようなところに進学する諸君は、農業系の科目も履修しております。そのようにして、将来的に自分の専門分野に関連するであろう科目は、農業であろうと、あるいは商業系の科目であろうと履修をしながら総合的な力をつけていこうということをシステムとしてはやっているということです。

ちなみに、30 単位以上、つまり専門学科と同じくらいの履修した生徒たちが、どのくらいの人数で、どのような進路になっているかを簡単に申し上げますが、平成 16 年度で言いますと、農業の関係はこんな形です。国立大学の農学部が 1 人、それから私立大学農学部が 5 人、短大の農学関係 1 人、それから農業系の専門学校 2 人、農業関連産業への就職 2 人ということで、これで 11 名の諸君がかなり深い農業の勉強をしながら、それぞれの進路を決定してきているという数字がございます。

以上であります。

（池上委員長）

ありがとうございました。

藤本委員、いいですか。そのところは。

（藤本委員）

基本的な傾向を、私は言っただけですので結構です。

（池上委員長）

今ご指摘がございました、ちょっと私に教えてください。拠点校に集中的な投資をかけるという方針は、だいたいそういう方向で決まっているということで考えてよろしいですか。そういう方針ですか。

（柳澤教育主幹）

先ほども申し上げましたように、明確な形で『最終報告』の中で述べられておりませんので、候補案の中ではここが拠点校という表示はしておりませんが、この通学区のこともそうですけれども、全県的にみますと、かなり集中してある職業高校というところもある

りますので、そういうところは、やはり生徒数の減少に応じて拠点化を図っていくという方針で考えているということでございます。

即座に、今藤本委員からお話がありましたように、各通学区1校にするというような明確なことではございません。

(池上委員長)

ありがとうございました。

その他、ございますか。

それでは、間もなく時間がまいりますので、2、3点お願いをして、今日は前段の議論と、それからようやく始まりましたというように申し上げたほうがいいと思うのですが、「魅力ある」という世界の議論をさせていただきました。

それで、小林委員のほうから方法論についてのご提言もございましたし、専門校の在り方等への意見もございました。そうことで、いよいよこれからその世界には、この次はしっかり入っていききたいなというように考えております。

それで、事務局にあらかじめお願いをしてございますが、先ほど学校への視察につきまして、公開授業の展開をしている情報はございましたが、議論が進んできて、結論になるべく早く抵触する、しないは別として、早い時間に学校の視察をさせていただきたいと考えておりますが、このあたりについて、事務局でご意見がありましたら出してください。

(野村主幹教育支援主事)

今回のことともかわりますが、次回を含めまして、機会をとらえてご要望に沿える形で行いたいと思いますけれども、どういう学校ということは、またご指示いただければ検討したいと思います。

(池上委員長)

今回は、議論の前に、次は、今度は諏訪実またはその他の学校という認識でよろしゅうございますね。

(野村主幹教育支援主事)

ちょっと今回のことも含めて申し上げたほうがよろしいかと思います。

今回の日程につきましては、9月22日木曜日を考えております。午前中になるかと思えます。それをもとに考えておりますけれども、ただ、会場につきましては、今の具体的に前回だったでしょうか、あるいは前々回だったでしょうか、諏訪実業というようなお話もございましたので、また相手方と調整いたしまして、できるだけその方向で考えたいと思えます。

(池上委員長)

当日は、午後まで継続して視察等の希望がある場合は、ということで考えていってよろしゅうございますか。

(野村主幹教育支援主事)

7月に飯田高校で行われました時は、会議を少しやって、その後視察というような形をとらせていただきましたが、この時期に至りまして、議論、検討していただくことが非常に大事だと思いますので、いつもと同じように3時間の会議の時間はとらせていただきたいと思います。そののち、学校の時間もありますので調整いたしまして、学校の授業等、あるいは学校の方とちょっと懇談できるような時間を設けられたらなということで調整しております。

以上です。

(池上委員長)

そういう認識で、大変お忙しいと思いますが、次回はできましてら午後にご視察もいただきたいというアレンジをしたいと思いますので、よろしく願いしたいと思います。

22日は、決定でよろしいですね。

(野村主幹教育支援主事)

はい。そういう方向で今お願いしているところでございます。ちょっと申し添えますと、また、もちろん委員長さんともご相談申し上げるわけでありませけれども、飯田の時には、バスをあつらえたりして行ったわけでございますが、恐れ入りますがそれぞれで移動というような形になってしまうかなというようになりますので、また委員長さんからもありましたが、変な言い方ですが、推進委員の任務として行っていただくというものには考えておりませんので、ご希望がある方にご用意させていただくということでお考えいただければと思います。

(池上委員長)

よく分かりました。そうさせていただきます。では、その点につきましては、そのように承知おきをいただきたいと思います。

それから新たなお願いでございますけれども、今日もいくつか資料やご意見をいただきました。大変ありがたいことだと思います。次回、もしできましてら、それぞれの、特に「魅力ある」世界のご意見につきまして、事前に事務局にご提出をいただいて、差し支えがなかったら会議の前日にもう見ていただくということで、次回以降させていただくほうがよろしいのではないかなというふうに思いますので、いかがでございましょうか。

例えば、今から数えて15日ころにはご意見をご提出いただくことにさせていただきますと、大変ありがたいと思うのですが。そのようにお願いをいたしたいと思います。事務局が、ひとつよろしく願いしたいと思います。

(野村主幹教育支援主事)

よろしいでしょうか。

こちらも、もっと早い時期に申し上げなければいけなかったかなと思って申し訳ないのですが、今委員長さんがおっしゃられましたように、できれば資料は事務局のほうへ1部原稿を出していただければ、それを必要部数刷りまして事前にという今ご希望ですので、

その意に沿いたいと思いますので、出される方もよろしくお願ひしたいと思いますが、
以上です。

(池上委員長)

では、そんなことでよろしくお願ひしたいと思います。

(藤本委員)

ちょっと間に合わない資料もあるもので、当日のものも若干出てくると思います。私の
つくってきた資料も、昨晚まで考えていた資料ですので、原則でお願ひします。

(池上委員長)

結構でございます。はい。

その他、何でもよろしいので、ご意見がありましたら。

(小林委員)

委員長さんに次回のお話をしていただいたのですが、もう少し「こういうことについて
検討する」ということを少しお願ひしたいと思います。

(池上委員長)

今回は「魅力ある高校づくり」ということに焦点を絞りたいと思います。ただその中で、
もう少し申し上げますと、内容については、先回もご提出をいただきました小林委員の方
法論だとかいうところについてのご意見と、それから、今度は具体的な科目についての内
容について議論をさせていただきたいと思いますので、よろしくお願ひします。

(熊谷委員)

前回の最後に委員長のほうから、飯田・下伊那で議論されている内容について出して
いただければ検討していただくというような話がございました。議論はされておりますけ
れども、今日この場で、私の立場で出すべきものではないというふうに思っております。当
然、県教委の案等につきましても、それぞれのいろいろな場面で議論はされておりますの
で、しかるべき時にはすることになるかと思ひます。

先ほどの議論にもありましたが、部会設置について、やはり必要性の共通認識ができ
きつつあると思ひますので、前回私のほうで、一応部会設置に対する提案ということでた
たき台を示させていただいておりますので、次回あたりに、事務局として、部会を設置す
るとなればどんな形になるのかというような案を、ぜひ出していただければと思ひます。
いずれにしても時間もないことでございますので、ぜひそんな段取りをしていただきた
いと思ひます。

(池上委員長)

それについては、こういうコンセプトでよろしいですか。

まず、当然のことでございますが、地区のご意向というようなことを踏まえての討議を、
この委員の中でグルーピングしてやっていただくという事態が想定されます。そういうこ

とでよろしいのか、または、例えば「魅力づくり」というところでも、ある意味ではご専門の世界の皆さんにお集まりいただいて、私の例を申し上げますと、服飾などというところは、私らには全く知識がないものですから、いくらお話を伺ってもわからないというところがございますので、そのようなカテゴリー別の話をそういう方向でやらせていただくということを考えるのでございますが、その点はいかがですか。

（熊谷委員）

時間の関係もございますので、委員長のおっしゃられる意味はわかるような気もするのですが、私の基本的な部会を設置する提案につきましては、前回示してありました中では、検討事項とか構成員、進め方等について提案させていただいておりますので、その辺について事務局としてはどのようにお考えになるのか、委員長さんの今のご提案も含めて、ぜひ議論ができればと思っていますので、よろしくお願いしたいと思います。

（池上委員長）

分かりました。はい。
ほかにございますか。

（藤本委員）

基本的な事なのですけれども、12月までにまとめなければいけないのでしょうか。

12月ということを経済局さんはだいぶ検討しているのですけれども、実はもうぐっと下がった後は、今はもう生徒数もずっと平らになっているわけですね。だから、いまさらこんなにはたばたと12月というのは難しいのではないのでしょうか。

全体会の時に、職務代理さんは、「1月でも、最悪」とちょっと漏らされましたが、私も12月までというのは、本当に県がしているのはちょっと不思議なのですけれども。もう平らになった状態ですので、ここはあきらめて、十分時間をかける。それ以上、私がするし、立場が長くないのですけれども、ちょっと急ぎすぎかなと思います。

県教委の事務局さんはどうなのでしょう。

（柳澤教育主幹）

前にもそういったご議論があったかと思いますが、第1回の推進委員会の時に示しましたスケジュール案でお願いしているところでございます。いよいよ具体論に入ってきたところでございまして、12月まで間がございまして、月2回程度ということでこれからもお願いをしているところでございますので、その間に十分議論を尽くしていただいて報告をいただければと考えているところでございます。

（池上委員長）

そういうことでございます。
ほかにございますか。

それでは、本日は、大変ご熱心にご討議をいただきましてありがとうございました。

それでは、9月22日、また詳細はご連絡を申し上げるということにさせていただきます。
大変お疲れさまでございました。ありがとうございました。